

中東の平和に関する考察

一橋大学社会学部 3 年
古川こころ

中東における平和とは何か

“Conflict-ridden region,” “region on edge,” “cycle of violence” …。

中東情勢に関する記事を読んでいると、このような表現を目にすることが多い。たしかに、ガザやシリア、イエメンなど、中東には平和とは言い難い地域が多く存在する。一方で、オマーンやカタール、クウェートなど、比較的平和¹が維持されている国も存在している。

中東というと、争いが絶えない地域というイメージがつきまといがちである。しかし実際には、平和な地域も存在し、平和を築くため、そして維持するためのさまざまな取り組みが行われている。平和を考える際には、何が平和を脅かす要因なのかを検討するだけでなく、何が平和を構築し、維持する要因となっているのかにも目を向ける必要があるのではないだろうか。

中東において、平和に向けてどのような取り組みがなされているのか。この問いこそが、本研修を通じて私が一貫して考え続けてきた軸である。紛争が続く地域であるからこそ、この問いを立てることには大きな意義があると考えている。

本稿では、平和を維持する取り組みの一例としてオマーンを取り上げるとともに、平和を構築するための対話の場としてアルジャジーラフォーラムについて論じたい。

平和な国〈オマーン〉

研修の前半で、私たちはオマーンの首都マスカットを訪れた。オマーンという国を訪れる前、私の中で同国の政治の特徴として真っ先に思い浮かんだのは、仲介外交という外交政策であった。もちろんそれも中東において欠かせない重要な役割であるが、今回の訪問を通してそれ以上に興味を惹かれたのは、オマーン国内の平和と安定である。ここ数十年、他国との大規模な戦闘もなく、犯罪率も比較的低い水準にある²。

その理由についてスルタン・カーブース大学の学生や教授に尋ねたところ、主に二つの要因が挙げられた。それは、スルタン・カーブースによる国内宥和政策と、宗教多数派であるイバード派の特徴である。スルタン・カーブースは 1970 年に即位して以降、国内の近代化を進めるとともに、部族間の対立を抑え、包摂的な統治を推進してきた³。また、イバード派はイスラームの一派であり、その神学的伝統は穏健性や寛容性を重視することで知られて

¹ ここでいう「平和」とは、暴力の不在として定義される、いわゆる消極的平和を指す。

² Institute for Economics and Peace が公表する Global Peace Index によれば、2025 年においてオマーンは 163 か国中 42 位に位置し、比較的高い平和水準を維持している
Institute for Economics and Peace, *Global Peace Index 2025, Identifying and measuring the factors that drive peace*, 2025.

<https://www.economicsandpeace.org/wp-content/uploads/2025/06/GPI-2025-web.pdf>
(最終閲覧 2026/2/25)

³ Dauletova, V., et al. (2024). *This is how they do it: A conflict management model in Oman*.

いる。イバード派の思想は保守的でありながらも一貫して寛容を説く特徴を持ち、宗派間の共存を重視してきたとされる⁴。

さらに、スルタン・カーブス大学の学生によるプレゼンテーションの中では、Majlis 文化についても言及されていた。Majlis とは、家庭内のリビングのような共有空間を指し、人々が集まって政治や社会の問題について議論する場としても機能しているという。こうした場での議論や合意形成の文化が、オマーン社会における平和を重んじる価値観と相互作用しながら形成されてきたのではないだろうか。

もちろん、オマーンにも貧富の格差や若者の失業、表現の自由といった課題は存在する。しかし、それにもかかわらず、国内の安定性が長期にわたり維持されている点は評価されるべきである。今回の訪問は、この平和をどのように維持していくのか、また、このモデルが他の地域にどの程度応用可能なのかといった多くの問いを私の中に残した、非常に貴重な経験となった。

平和への取り組みとしての AJ フォーラム

オマーンを訪れた後、私たちはカタールに戻り、Al Jazeera フォーラムに参加した。平和を築くためには、対話のチャンネルの存在が不可欠である。それは国家首脳間の公式な外交ルートに限らず、あらゆるレベルにおける対話が必要である。この Al Jazeera フォーラムは、多様な立場の人々をつなぐ重要な対話の場であり、いわゆる Track II diplomacy⁵ の一例として機能していると考えられる。

フォーラムにはイランやトルコから政府関係者が参加し、アラブ連盟諸国からも政治家、研究者、ジャーナリストなどが集まっていた。また、メディアである Al Jazeera がこの国際会議を主催している点も非常に意味深い。議論を促進し、メディア自体が平和のアクターの一つとして機能しているように感じられた。

その中で、最も印象に残ったのは〈アラブ〉という一体感であった。多くの登壇者が、個別の国家の立場を越えて、「アラブとして今後どのように行動すべきか」という視点から議論を展開していた。これは、いわゆる pan-Arab identity が現在でも政治的想像力として強く機能していることを示しているのではないだろうか。Al Jazeera が主催していることも影響しているかもしれないが、そもそもこのような広範な国際会議を主催できること自体が、〈アラブ〉という枠組みの結束の強さを示しているように感じられた。議論の端々、特にトランプ政権のいわゆる“Peace Plan”に関する議論では、域外からの介入に対する警戒感が強く感じられた。この一体感の背景には、文化や宗教だけでなく、植民地支配の歴史的記憶も大きく影響しているのだろう。そうした記憶が、アラブとしての連帯を強めると同時に、外部からの介入への抵抗感にもつながっているように思われた。

さらに、議論の中からはある種の無力感も伝わってきた。今回の AJ フォーラムではガザ問題が主要なテーマであり、中東諸国にとって極めて重要な問題である。しかし、現状では

⁴ Elliott, C. D., *Developing Tolerance and Conservatism: A Study of Ibadi Oman*, UCLA Journal of Religion, 2018.

⁵ Track II diplomacy とは、政府間の公式外交とは異なり、学者、専門家、市民社会など非公式アクターによる対話を通じて紛争の緩和や相互理解を促進する外交的取り組みを指す。Joseph V. Montville, “Track Two Diplomacy: The Arrow and the Olive Branch,” in *The Psychodynamics of International Relationships*, 1991.

その動向を主導しているのは主にアメリカであり、アラブ連盟の影響力は必ずしも大きいとは言えない。

サウジアラビアのナイフ・アラブ安全保障科学大学から参加していた Dr. Hesham は、現状を打開するための方向性として、アラブ連盟加盟国における内戦の終結、地域安定の重視、国際的パートナーシップの多角化、そしてアラブとしての立場の明確化の必要性を指摘していた。ただ、全体を通してアラブ連盟の弱体化の要因や危機感を乗り越えるための具体的な解決策に関する議論はやや限定的であったように感じられた。すべてのセッションに参加したわけではないため見落としもあるかもしれないが、この点は今後さらに考えていきたい重要な問いとして残った。

誰が平和を築くのか？

対立は個人から国家まであらゆるレベルの社会で起こりうる。それと同時に、対立が、武力を伴い衝突にエスカレートしないよう抑制する取り組みもあらゆる場所で観察することができる。平和を維持するための取り組みとして、オマーンの宥和政策と宗教が、平和を作っていくための取り組みとしてカタールではアルジャジーラフォーラムが存在していた。

もちろん、これら一つ一つの取り組みは決して完全なものではなく、多くの課題や矛盾を抱えているのだろう。平和を築く道のりは長く困難である一方で、壊れるのは一瞬である。実際に中東でも、平和とは言い難い状況が続いている地域が少なくない。それでもなお、平和に向けた取り組みが確かに存在し、それに真剣に向き合っている人々がいることを知ることができたのは、本研修における大きな収穫であった。

総括と今後の展望

オマーンで話をした学生の二人は、「私たちは宗派が違うけれど、それが関係性の障壁になっているとは感じない。同じモスクで祈り、同じ教室で学んでいる」と語っていた。平和とは、政府や国際機関のレベルでのみ動く大きな枠組みとして存在するだけでなく、このように日常の中に自然と織り込まれている小さな実践でもあるのだと感じた。

さらに、本研修に参加したことで、自分の中で「アフリカはアフリカ」「中東は中東」といった地域区分が、認識の枠組みとして強く作用していたことにも気づかされた。しかし実際には、ソマリアやスーダン、エチオピアといった国々は、アフリカと中東の双方から多様な影響を受けている。一つの国家や一つの地域のみを切り取って理解しようとするのではなく、より広い視野から問題を捉える必要性を実感した。この視点を得ることができたことも、本研修における大きな収穫の一つである。

字数の制約上、すべての訪問先について詳述することはできなかったが、本研修でお世話になったすべての方々、そして木村さん、ワイエブさんをはじめとする笹川平和財団の皆様は心より感謝申し上げたい。温かく受け入れてくださり、ありがとうございました。

また、参加者の皆さんにも深く感謝している。自分にはなかった視点を数多く学ぶことができたこと、そして皆さんと出会えたこと自体が、本研修における大きな財産となった。今後もこのつながりを大切にしていきたい。